

## 美術館の春まつり

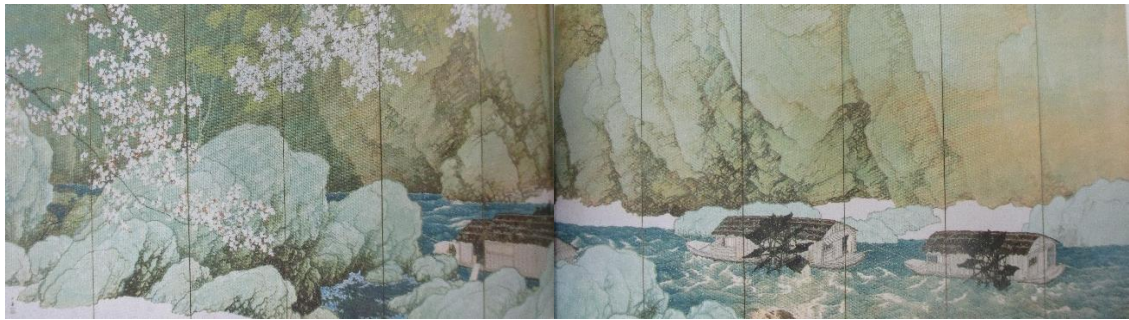
東京国立近代美術館(竹橋) 24.03.15~04.07



桜の開花時期に合わせて毎年開催される当館恒例の催事「春まつり」は、19世紀末から今日に至る日本近代美術の流れが閲覧できるコレクション13,000点もの所蔵品から、選りすぐりの春にちなんだ作品「約200点」が集結している。

作品は、12の展示室にテーマを設けて様々な切り口から紹介がされていて、近隣の皇居・千鳥が淵の桜とともに、美術館の春を楽しもう！と案内がされている。

川合玉堂 《行く春》 1916年 六曲一双の大作(7.8m)の屏風絵



当館代表作の一つで、春の桜の時期だけ公開される「重要文化財」である。

日本画の巨匠である画伯は、日本の山河をこよなく愛していて、作品は埼玉県長瀨を舞台に晩春に桜花が散りゆく溪谷に、大きな岩肌が幾重にも連なり陽光に照らされている。岸には3隻の水車船が繋がれ、仕事をする人の姿や水車から勢いよく水が流れる様子が見られ、日本人の心の風景を暖かい視線で丹念に描かれている。しかし、長瀨には無い筈の木造船があるのはどうしてか？

菊池芳文 《小雨降る吉野》 1914年 絹本・屏風6曲・1双



画伯は桜の名手と言われた名人芸を発揮して、描かれている右隻の谷超しに遠くの桜が煙雲とのまぎれる光景は、古歌にも詠まれている。作品は、観照へと転じて華麗な花鳥画の舞台となる一方しめやかな舞台となっている。

この高度の芸は、感傷的に眺めるような観照の世界を無理のない画面に展開させて、世界へと誘(いざ)なわれていく作品とされている。